

# 明治から続く「応援の文化」

## ツール・ド・のと

きょう16日に開幕する「ツール・ド・のと400」の原点とも言える明治後期の「北國新聞社自転車大競走」に光が当たり、7月には当時のコースをたどる再現イベントが実施された。

北陸初となる自転車大競走はこの地域のサイクルスポーツの源流であり、本社が自ら企画した大型スポーツ事業を紙面で大々的に伝えた先駆けとみられる。スポーツが新聞事業として定着していく嚆矢でもある。

スポーツ庁が理念に掲げる「する」「みる」「やる」の3要素のうち、「みる」「やる」は新聞もその一端を担ってきた。明治から続く「応援の文化」を

らに根付かせ、スポーツを通じた地域活性化を追求していきたい。

自転車大競走は1906（明治39）年10月に行われ、選手18人が金沢―七尾（往復128キ）、金沢―大聖寺（同96キ）の2コースに分かれて順位を競った。当時は道路が未舗装で、自転車の性能も悪く、チェーン切れやペダルが外れるトラブルが続出し、棄権者も相次ぐ過酷なレースだった。

明治の紙面で目を見張るのは、そつした選手の奮闘やレース結果だけでなく、満艦飾や打ち上げ花火による沿道の熱狂的な歓迎や栄養補給の鶏卵、梅干し、牛乳などを提供する手厚い接待ぶりを詳しく伝えた点である。競技を報じる本記と周辺雑感で構成する紙面ス

タイトルは、スポーツ報道の原点を見る思いである。

今年で35回を迎えたツール・ド・のとも、ポイントごとの山の幸の提供や沿道の温かいもてなしが取材の大きなテーマとなる。117年の時を超え、二つの大会の歴史はつながっているように見える。

当時の紙面では、本番前から連日、出場選手の情報やコースの見

所を繰り返し紹介し、大会を盛り上げた。事前告知や競技報道によって読者を「観客」に育て、新聞が「見るスポーツ」定着へ一定の役割を果たしたことは間違いないだろう。

ツール・ド・のとは全国のロングライドレースの中でも歴史の古い大会になった。北陸を代表する公道スポーツとして、今年も地域挙げて盛り上げていきたい。